

伊勢物語終焉歌の周辺

1

伊勢物語は、定家本に代表される百二十五の章段から成る本文が、「昔、男」を主人公に一代記的な構成をもつ物語として、長い伝流享受の歴史を支えてきたといつてもよいであろう。現存はしないが、「君やこし」の歌で始まり「忘るなよ」の歌に終る小式部内侍本は、定家本でいうと、第六十九段から始まり第十一段で終るわけであるから、各章段の排列順序は不明ながら、少なくとも一代記的な構成という観点からこれを取扱うことはできない。

さて、その一代記的な構成の伊勢物語が、その最後の章段として設けたのが、終焉の段として知られる次の物語である。

むかし、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

室伏 信助

この段は、初段のいわゆる初冠の章段とともに、一代記的な構成の首尾を担うわけであり、そこにこの物語の一貫した構想を意図する作為性を認めることができる。その事実をさらに内在的に裏つけるものとして、前段にあたる第百二十四段の物語の内容と位置とが考慮されているように思われる。

むかし、男、いかなることを思ひけるをりにかよめる。

思ふこといはでぞただにやみぬべきわれとひとしき人しなれば

歌にいう「思ふこと」がどんな内容かはわからない。物語にも「いかなりけることを」とあって、語り手がそのことにつとめて触れようとしなない態度を示しているから、内容を特定することは、却って作意に反することにもなりかねない。

第二十一段に、相愛の男女がちよつとしたことで気まずくなり、女が家出をする話があるが、そこにも「いかなりけることかありけ

む」とあって、語り手がその理由に深く立ち入ることを避けている。贈答歌が七首あり、男女は互いに歌を詠み合い心を交わしたが、結局「おのが世々になりにければ、うとくなりにけり」とあって破局に終わってしまう。従ってこの段の物語の進展は歌の贈答が担っており、それにすべてが託されているといった趣である。

伊勢物語の中心に歌があるということは改めていうまでもないが、過度の比重が歌にかけられている場合もしばしばある。第二百二十四段の「思ふこと」も、その内容はきわめて漠然としているが、歌の下の句「われとひとしき人しなければ」という条件の呈示は、おそろしく明快で断固たるものがある。それなればこそ、その条件を逆手にとれば、「われとひとしき人」を求めて、物語の世界にはさまざまな人間関係が設定されたといえるのではないか。しかし、いまこの結論に達し、諦観を得たからには、これ以上なにを語りなにを歌えばよいというのか。そういう語気は、当然、つぎの終焉の段を導く上に、大きな効果を及ぼしていると思われる。

第二百二十四段は、成立論の上で第三次段階以後に付加された章段とされている。もちろんそれがいつかは明らかでないが、この歌が後に新勅撰和歌集雜二に第二句を「いはでただにぞ」として作者を業平と記すのは、伊勢物語を業平の物語と見て引いた例と考えてよい。かりに、つぎの終焉歌よりおかれて伊勢物語の組織に加わったものとすれば、上に述べたことがらは、男の一代記がかなりの分量の物語として多様性をもつに至ったとき、それらを統括し終末を導く章段として、静かに自己を凝視し沈黙を宣する一段がここに付加

される必然を説き明かしてくれよう。

しかし、このような作爲性は、ある意味ですでに先蹤があったといえる。高橋正治氏は、第二百二十四段は「恋の遍歴、その他複雑な人間関係の中を生き抜いて来て、しかもそこを抜け出した心境を述べたもので、古今集の卷十五恋五の最後の二首とおなじ性格をもつ」と述べた。それは必ずしも典拠とはいえないにしても、構成の類似性にはやはり注意してよいだろう。古今の二首は、

友則

浮きながら消ぬる泡ともなりなむ流れてとだに頼まれぬ身は

よみ人知らず

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中
つらい思いを抱いて生き長らえたとして、さらにこれから望みを持
てるわけでなし、いっそこのまま死んでしまいたい、と歌う前歌。
長い人生の間には男女の仲も波瀾万丈、まあよし、それが世の中、
と歌う後歌。松田武夫氏の構造論によれば、恋五の世界は恋の終末
期を経過的に描いたもので、とくにその結末は「わびはつる歌」
「恨むわが身」「心の秋」「仲絶えて年経る」と歌が続いたあとこ
の「あきらめ」の二首で結ばれるが、「夫婦関係の結ばれた後で、
相離れ、捨てられ、忘れられた男女の抱く哀感を、漸層的に盛り上
げて、諦観といふ最後の帰着点にまで、持ち来った」と、この巻の
構造を捉えている。

古今の場合には恋という主題の枠内にあるから、伊勢物語の多様な
内容とは直接比較の対象にはならないかもしれない。しかし、歌物

語というもつと幅広い世界の出来事を包括し整序する方法が、例えば勅撰集を先蹤とすることで、いっそう確かな形象を得ると見ることは許されよう。

2

伊勢物語終焉の段が、その前に「思ふこといはず」という語観を歌う段を置くことで「つひにゆく道」の到来を必然化した経緯をたどって見た。その事實は、男が「わづらひて、心地死ぬべくおぼえ」と記しても、そのままでは、単に肉体的条件の潰えの果てに死が訪れたことを描くのみで、人生の長い遍歴の果てに、この物語の主人公を葬り去るにはならないことを示している。「われとひとしき人」を求めて得られず、この世に絶望して「わづらひ」、「心地死ぬべくおぼえ」で辞世の歌をよむ。これがこの物語の世界を歩みつづけた主人公の死にふさわしいとする認識、物語論的論理が、定家本に代表される伊勢物語を形造らせた。

ところで終焉の歌は、周知のように古今集卷十六哀傷歌に載る在原業平の歌である。

病まして弱よくなりける時によめる

業平朝臣

として歌がある。それが臨終の歌とされるのは、詞書や歌意によることはもちろんだが、この歌が哀傷歌に部類され、しかも辞世の歌六首を一括して巻末に排列している中の一首という事実によって、いっそう確かな印象を刻むことになった。

六首の歌の詞書と作者名をあげると、つぎのようになる。「式部卿のみこ、閑院の五のみこに住みわたりけるを、いくばくもあらで女みこの身まかりける時に、かのみこの住みける帳のかたびらの紐に、文を結びつたりけるを取りて見れば、昔の手にてこの歌をなむ書きつたりける」(八五七)、「男の人の国にまかりける間に、女にはかに病をして、いと弱くなりける時、よみおきて身まかりける よみ人知らず」(八五八)、「病にわづらひ侍りける秋、心地の頼もしげなくおぼえければ、よみて人のもとに遣はしける 大江千里」(八五九)、「身まかりなむとよめる 藤原惟幹」(八六〇)、「そして業平の歌を置き、最後は「甲斐国にあひ知りて侍りける人訪はむとてまかりけるを、道中みちなかにてにはかに病をして、今々となりければ、よみて『京にもてまかりて母に見せよ』と言ひて、人につけ侍りける歌 在原滋春」(八六二)でこの巻は終っている。

右の六首中、最初の二首の詞書は詠者の死後、第三者の手で見いだされたことを察知させるが、第三首・第六首はいずれも特定の相手に宛てて詠まれたもの。また、第四・五首は詠みかける相手を明らかにしない歌で、作歌事情はさまざまながら、いずれも死という敵愾な事実を前に詠まれた感慨を、それぞれに語り伝えている。

古今集所収の業平歌三十首は、すべて伊勢物語に入っている。作者名のわかる歌としてはもちろん最高の数であり、定家本でいえば全所収歌の七分の一に達している。伊勢物語が業平の物語と見られていたことは、その点に徴しても明らかで、伊勢物語という作品名が始めて文献に記されたとされる源氏物語に、「在五が物語」とい

う異称を併せ載せているのは、きわめて象徴的な事実といわなければならぬ。しかし、物語の書名が伊勢物語に限らず、いろいろな作品が何通りかの呼称で伝えられているのは、物語という作品の享受のありかたと密接に関わりと見て間違いあるまい。一方が公的な呼称で他方が私的な呼称と見る立場もあるが、公的私的という規定自身がすでに享受の場の問題でもあるのである。いま一度、源氏物語にかえてこの問題を考えてみると、「伊勢物語」という名称は絵合の巻にあり、「在五が物語」は総角の巻にあるが、前者は物語の世界ではあっても中宮を判者とした絵合という準公的な場であるのに対して、後者は匂宮が姉君の女一宮に物語絵を材料に戯れかかるといった私的な場で用いられており、名称がやはり微妙に使い分けられていると見られる。もっとも、前者の記事の中に、藤壺のことばとして「在五中將の名をば、え朽さじ」とあるのは、そのすぐ前に平内侍の発言「業平が名をや朽すべき」を承けて、言い換えた趣があるが、いずれも物語の主人公に実在人物を何のためらいもなく言っている事實は、両者の同一視がほとんどこの作品の本性に由来することを裏書きするものといえよう。

しかし、それにも拘らず、伊勢物語が「業平」ないし「在五中將」を表立って示さなかったこと、というより、古今集に拠りながら、あるいは一歩さがって古今集を念頭に置きつつも、あえて作者名を切り落し、そのことが同時に「昔、男」なる主人公を敢然と表立て、一貫して物語の主人公たらしめた事実と、やはり区別して考へなければならぬことは言うまでもない。その事実にもこだわりの

は、一方に歌語りとして、実名を表示する業平説話が現実形成されていたという点に関わり、そうした歌語りとの本質的な差異が、とりも直さず、作品としての伊勢物語の特質を明らかにすることになると思うからである。

3

大和物語第百六十五段は、在中將すなわち業平の終焉を伝える歌物語である。

水尾の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の御息所とていますかりけるを、帝御ぐしおろしたまうてのちにひとりいますかりけるを、在中將しのびて通ひけり。中將、病いとおもくしてわづらひけるを、もとの妻どももあり、これはいとしのびてあることなれば、えいきもとぶらひたまはず、しのびしのびになむとぶらひけること日々にありけり。さるに、とはぬ日なむありけるに、病もいとおもりて、その日になりけり。中將のもとより、つれづれといとど心のわびしきにけふはとはずして暮しとむとや

とておこせたり。「よはくなりになり」とて、いといたく泣きさわぎて、返りごとなどもせむとするほどに、「死にけり」と聞きて、いとみじかりけり。死なむとすること、今々となりてよみたりける。

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

とよみてなむ絶えはてにける。

見られるように、二首の歌を中心に前後二つの話から成立している。清和天皇に仕えた弁の御息所が、天皇の出家後、業平と通じたが、その業平が重病になり、御息所は業平の妻妾たちの目を忍びながら、毎日手紙を届けていたところ、いよいよ臨終となつてたまたまその日便りのないのを嘆いて業平の詠んだ歌の部分が前半で、それに付け足したかたちで古今集や伊勢物語に見える臨終の話を後半に据えている。

ところで、この前半の部分は、多少簡略した叙述ながら、前田家本在中将集(二八)と雅平本業平集(九四)に小異はあるが伝えられている。前者を底本に後者の校異を傍記して示すと、つぎのようになる(読点・濁点を加えた)。

みづのおの^{みかど}御時^に右大弁のむすめ弁のみやすどとろとてさぶらひけるを、みかど御くしおろさせたまてのち、いとしのびてかたらひ^侍けるほどに、わづらふことありければ、しものびて女日とにとぶらひ^{やり侍}けるを、いかなる事かありけむ、せうそこ^もをこそせざりける日、心地もいとよはうなりにけれ^侍ば、かうぞいひやり^侍ける、

つれづれといとど心地のわびしきにけふはとはずてくらしてむとや

さてよはうなりにければ、返ごともえせでぞなきける、

大和物語の記事は、前半に弁の御息所が業平の重病を知って泣き騒ぎ、返事もしないでいるうちに「死にけりと聞いて」とあるよう

に業平の死を叙しているが、その後が続くわゆる終焉歌との結びつきは、別々の伝承をかなり無造作につなげてしまったという印象を消しがたい。しかし、その連接について今井源衛氏は、前半の部分が簡略化されたかたちで在中将集や雅平本業平集にあり、しかもそれとは別の個所に「つひにゆく」の終焉歌を取めていることは、本来「同一の原材料が、家集と大和とに流れ込んでそれぞれ形をとったとみるべきであろう。そして、家集と大和とに共通しない要素を、大和独自の物語化の跡と見るならば、それは右に述べた臨終の日のこととする点である。例の有名な『つひにゆく』の歌と共に一個所にまとめて業平の死をより哀切に、色どより豊かなものとするのが、作者の意図だったのであるまいか」と評した。それに対して、柳田忠則氏は「前後の続き具合がすつきりしないこと」や「時間的なだぶつきや場面の移り変わりに不自然さ」のあることを指摘している。また、菊地靖彦氏は連接の不自然さを認めながらも、「禁忌を犯す在中将のイメージを、その最晩年においても語ろうとして、作者は苦心しているのである。二人の関係が忍びの上にも忍びであったことを、作者は懸命に語る」と論じた。

諸説で指摘されたように、もともと出所の違う伝承を一つにまとめたことから生ずる文章上の連接の悪さ、ぎこちなさは残しながらも、そこに一代の好色者業平の最後を飾ろうとする精一杯の演出は認められそうだ。たしかにこの作為性こそが大和物語の方法であり、歌語りという伝承を実録として集成するこの和歌の説話集の本質でもあった。が、一方にやはり連接の不自然さによる異和感を払

拭ききれなかったことは、実名表記の方法と共に、文章表現そのものに実在感を与えていく伊勢物語の方法との本質的な差異を明確にしているといえるだろう。伊勢物語第二百二十四段が、つぎの終焉の段と形態の面で別個の独立章段を形造りながら、物語全体の主人公の死をより確かなものとして導き出す方法は、素材の相異を超えて、人生史を抒情と反俗の精神によって構築してきた伊勢物語の、無類の特質を顯示するものといわなくてはならない。

4

前節で大和物語の方法をめぐって、業平終焉の段が伊勢物語のそれと異なる様相を考えてみた。大和物語の業平章段が、伊勢物語で採上げなかつた歌語りを積極的に採り上げていくところにその独自性を読む見方もあるが、確かに伊勢物語の有名章段はあえてこれを避け、伊勢物語を意識しつつもこれと異なる方向に歌語りを集成し、実名表記を立立てて現実感を与えようとした作為性は認められなければなるまい。ことに大和物語第六十一段の在中将と二条后との物語は、伊勢物語第三段と第七十六段とを合成したところに、新たな興味をつなぐ意図がうかがわれる。これを作品化前の歌語りの世界に起った現象とは見ずに、その「構想性は歌語りには無縁」とした上で、伊勢物語との書承関係を考える菊地靖彦氏の考説は、従うべきものと思われる。

しかし、伊勢物語といってもその伊勢物語はやはり定家本に代表される本文の状況を一往の目安と考えることを立論の前提に据える

必要があると思う。何となれば、いわゆる異本の本文状況は、つぎに検討する塗籠本の終焉の段一つを採上げても、大和物語第六十一段で起った現象とほとんど同じ現象が、伊勢物語でも起っているからである。そればかりではなく、例えば有名な東下りの第九段にしても、定家本における四首の歌のうち第二首目の「駿河なる」の一首は、大島家旧蔵伝為氏筆本の末尾に付加した小式部内侍本では、定家本第二十一段の「中空に」の歌と並んでまったく別の独立した章段の中に含まれているのである。「駿河なる」の歌が西本願寺本忠岑集や古今和歌六帖に載せる類似の歌と関わりがないといえず、いろいろな観点から、「この歌を含む宇津谷峠の部分は、後になってから加えられた部分と思うのである」とする片桐洋一氏のような見解もあり、そうだとすれば定家本自身がさまざまな変転を経て現在の本文状況をつくりあげた内実と表現の達成度において、伊勢物語の文学史的意義が問われねばならないだろう。大和物語の方法が伊勢物語の形成と無縁であると言いつけることは、形態的にこれを論ずる限り不可能であり、内容的に見てもその文学的な達成度は、文章形成の独自性からこれを測定する以外に方法はなからうと思われる。

さて、塗籠本における終焉の段を左記に見ることにしたい。

昔、男、みやこをいかが思ひけむ、東山に住まむと思ひ、いき

住みわびぬ今はかぎりの山里に身を隠すべき宿もとめてむ
なんど、よみをりけるに、物いたう病みて、死に入りたりけれ

ば、^ま面に水そそぎなどして、生きいでて、

わが上に露ぞ置くなる天の河とわたる舟の權のしづくか

といひてぞ生きいでたりける。まことにかぎりになりける時、

つひに行く道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

とてなむ絶え入りにけり。

「住みわびぬ」と「わが上に」の二首を含む前半の内容は、定家本では第五十九段に該当する。この五十九段にある前歌は、後撰和歌集卷十五雜歌一に載る業平の歌である。

世の中を思ひうじてはべりけるころ、

業平朝臣

住みわびぬいまはかぎりの山里につま木こるべき宿もとめてむ

また後の歌は古今和歌集卷十七雜上に「題しらず よみ人しらず」として載るほか、新撰和歌集卷四にも収まっている。前歌については肖聞抄に「業平左遷の時分なるべし。先、都を出て東山にありしにや」といい、闕疑抄も「左遷の時分か」とするが、宗長聞書は「流罪の時分のことなるべし」とさらに厳しい。すでに古く冷泉家流の古注で「二条后故に忠仁公にあづけられし時の事也」とする理会の流れを増幅して継承していると見るべきであろうか。後撰集時代に伝流した資料は、古今集の一等資料と同等には扱えないものの、勅撰集に採られた業平の歌として、早くから伊勢物語の形成にあずかった資料性は重視せねばならない。

しかしながら、この歌がつぎの古今集歌と合体して第五十九段としてこの位置におかれた理由は、前後章段の内容と直接関連するところがないことから、まったく別個の基準というか、一種の言語遊戯性ともいふべき言葉のつながりを指摘しなければなるまい。^(注9)

すなわち、地名について見るに第五十八段の「長岡」、第五十九段の「東山」に対する第六十段の「宇佐」、六十一段の「筑紫」といった対照表現、また五十八段の「うちわびぬ」に対する五十九段の「住みわびぬ」、そして「東山に住まむ」に対する六十段の「山に入りて」、さらには同段の「袖」が六十一段の「濡れ衣」を喚び、さらに六十二段の「衣」へとつづいていく不思議な現象は、おそらくこれまで一度も指摘されなかった伊勢物語形成の秘事であり、後節において終焉の段をめぐって同様の現象を指摘して問題提起を行いたいと考えているが、この章段に即して、典拠を異にするまったく異質の歌を一段に共存させる要因に、いま述べた言語遊戯性を考慮に入れられない限り、この段の形成の秘密は容易に解きたいであろうことを述べておきたい。

「わが上に」の歌については、古くから七夕の歌と見る説と宮中の酒宴に賜祿のよろこびを歌ったと見る説とが対立しているが、独立歌としては前者であったものが、古今集では雑の部に入り秋の部に入らなかつた意義を重く視て後者の見解が生じたことは疑いない。歌の多義性はこれを否定すべきでないから、双方とも認められるが、ただこの二首を共存させた結果、表現効果としての滑稽感^(注10)は、旧注などで經典を引き、蘇生譚に重みを与えようとしても拭い

去ることは困難であらう。

伊勢物語の蘇生譚は定家本の第四十段にもあり、美しい婢と通じたまだ部屋住みの若者が、親に仲を割かれて一旦絶命するが、祈願の甲斐あって蘇生する話である。ところが広本系の諸本では若干筋書が異なり、若者は蘇生後に再び絶え入ることになっている。「死にかへる」という古語は、万葉時代には幾度も死ぬことを意味したが、平安時代には死ぬほど……するといった、程度の基だしさをいう副詞的用法となつて広く用いられた。

この段の話も、本来は京を去つて東山に侘び住まいを求めた男が、病を得て死んで行くとき、蘇生の行法ともいふべき方法によつて生き返つたという説話性をもつていと考えられる。この説話性が塗籠本作者によつても、主人公の終焉を飾るべき最終段に活用されたことになるのである。しかもその効果は、定家本第四十段の蘇生譚を覆し、再び主人公を死へ追いやった広本と同じ効果をもたらすことになつた。従つて、塗籠本による限り、定家本が表現しようとした文学性は消え去り、説話的な効果とともに一種の滑稽感がたつたことになつたことは、これを否定することができない。

大和物語にも見られたように、それが説話のもつ大きな特色という観点からすれば、伊勢物語を形成する要因の一つに、かかる説話性を認めないわけにはいかならう。塗籠本の終焉の段に、もし説話的でない要因を求めらば、この後で定家本に焦点を絞らなければならぬ言語遊戯性が、この中で一つあることを指摘しておこう。第一首目の「いまはかぎり」と三首目の前文「まことにかぎ

り」の照応は、この段の形成に塗籠本作者が着眼した最初の作因であつたかも知れないのである。

5

定家本終焉の段の表現性については、その前の段との関わりにおいてすぐれた効果ももち得た点について、すでに第一節で述べた。しかし、歌物語がその中心をなす歌の形象において、その達成度を最高に發揮せぬとしたら、まことに索漠たるものがある。この物語の主人公がさまざま人生遍歴の果てに絶望し、病はついにその肉体を蝕んで主人公を死に追いやる。その今際のきわに辞世の歌を詠んで死を迎えるという表現性が、まさにその辞世の歌に凝縮して象られるならば、その達成度は最高のものとして評価されよう。

「此歌は、獲麟の一句なるべし。むかし、男、うゑかうぶりしで、といふにはじまりて、此一首にかきとめ侍て、始終をあらはし侍る作者の心、絶妙なる物をや」（愚見抄）と評したのは一条兼良だが、歌そのものの評価ではない。それより古く難義注で「業平の心には、終に行道とはよくさとりぬたると也。此終焉の一念はつゝしむべき事なれば、教誡たるべき故也。又在五中将は住吉の分身なれば、仮令にも人と成て世を誡たるを、今こそかぎりとしてまかる也」とする教戒説も、悟り切つた業平像や住吉明神分身説などを掲げるのは、歌そのものの理會に基づかない意見といえよう。江戸時代に契沖が「是まことありて、人の教へにもよき歌なり」とするのは、死に臨んで大仰な歌や悟つたことを詠んだりせず、死に直面し

た驚きを素直に歌った点を評価していることによるためである。

ところが、すでに山口抄において宗祇が、「古註に、きのふまでは、けふとは思はざりしを」と云て、心あまりて詞たらぬ歌といへり。当流はうちまかせて、たゞきのふけふとは思はざりしといへり。まことにあはれも深くや侍らん」と述べ、歌のことは違ひに對する意見を、古来の解釈を退けて示そうとした。宗祇は「当流はうちまかせて」と述べるだけで、古註でいう「昨日まではまさか今日（死が訪れよう）とは思ひもしなかつた」という合理的な解釈を具体的に批判していないが、宗祇の教えを受けた三条西実隆が「きのふまではけふとは思はざりしといふ儀大にきたなし」（直解）と評していることから見て、古歌の習熟から体得した語感が宗祇の心にもあつたことを推察させる。

しかし、近世になつて藤井高尚（新釈）は、この点について明解を示した。

歌の意明らかなり。おもはざりしをといひさして、いま／＼となりける事かなといふ意ふくめたり。さて道理もていはど、けふあすとは思はざりしをといふべく、きのふはしれざりしかば、とり出ていふまじき事なれども、歌は詞のあやなくてあはれと人のきくやうによむものなれば、理になつまずしてをり／＼かゝる事ある也。けふあすといひては四の句詞とゝのはねばきのふけふとはいひて詞のあやをなしたるにて此頃とおもはざりしをとおはよそにいへる意なり。

歌は理屈ではなく「詞のあや」ともいふべき修辭こそが大切であ

る旨を、言い含めるように説いている。理屈では確かに「今日明日」だが、それでは四句目の語数に合わず、語調が乱れることに注意しているのである。

確かに高尚の説は、業平歌の意を存分に引き出すものといえるが、しかし、修辭の面に関する周到な理會が、却つて業平歌の修辭の特異性を一般化する方向にはたらき、「きのふけふ」の破格な用法の意味するものを取りこぼしてしまつた惧れさえ感ずるのである。

「きのふけふ」は、例えば万葉集では「きのふけふ君に逢はずて」（三七七七）「きのふもけふも雪の降れば」（三九二四）のよう過ぎ去つた時間の連続した相として捉える用法であり、古今集においてもそれは変らないのである。「きのふといひけふと暮らして明日香川」（三四一）「明日香川きのふの淵ぞけふは瀬になる」（九三三）。従つて、業平終焉歌のように「けふかあすか」の意味で「きのふけふ」を用いることはなかつたのである。たとえ「詞のあや」としても、意味を違え、慣用を越えた用法は、それ自身特異な表現法といわねばならない。単に語調に合うからといって済ませる問題ではないのである。

しかし、そこにこそむしろ業平歌の独自性——真骨頂があつたといえるのではないか。すなわち、「きのふけふ」という古くから言い慣わされた歌詞のリズムに身を委ねながら、その意味するものはまったく逆の、異例な用法からくる意味上の疑義が言い知れぬ不安感を読む者に与える、という表現の効果を押さえてこそ、修辭が極度の緊張感をもつて存在する業平歌の特質を知ることができるので

ある。

6

最後に、各段の排列が必ずしも内容的な連接によらず、その段に用いられたある種のことばの照応という、思いがけぬ言語遊戯的機能が存することを問題提起的に述べてみたい。

先に終焉の段が、その前に位置する第二百二十四段の表現性によって、死を必然化する内面性を得たことを見てきたが、さらに兩段相俟って物語全体を統括する効果をもったことを述べた。しかし、そうした効力は個々の章段——例えば第二百二十三段なりその前段なりへ溯って發揮されることはないであろうか。残念ながら、内容的な尺度による限り、連接の関わりはまったく見いだすことができない。それに反して不思議なのは、和歌的な修辭とも考えられる用語が鎖状につながっていると見られることである。意味に關係なく単に同音の語の用法も含めて、伊勢物語の各段の排列、ひいては全体の構成などに、そうした修辭の面からの接近がどれほど可能であろうか。また、こうした事実がかりに認められるとすれば、それはこの物語を形成する表現主体とどう結びつくのであろうか。
さまざまな想いが去来するが、ひとまず今回は紙面の都合もあり、終焉の段に近い十章段に限って、具体的に用語を抜き出し、若干の注記を加えたいと思う。

- 第百十五段 1 陸奥 2 都島
- 第百十六段 1 陸奥 2 小島 3 久しく・はまびさし 4 みなよ

く

注 2 は「都島」の一部の音。仮名書であることを考慮する。

3 「はまびさし」は万葉集の「浜久木」^{はまひさま}を伊勢物語で読み誤ったためにできた歌語とされ、「久し」を導く序として使われるが、むしろここに相適しい言語遊戯性を考えるべきか。

第百十七段 3 久しく 4 住吉

注 前段の「みなよく」は具体的な意味合が判然としない点、

「住吉」にかけた言語遊戯性が考えられる。

第百十八段 3 久しく 5 忘るる 6 はふ木あまた

第百十九段 5 忘るる 6 あだなる

注 6 は意味上の照応

第百二十段 6 つれなき 7 人の御もとに忍びて 8 鍋

注 6 は対照的表現

第百二十一 7 人のまかりいづる 8 笠 9 雨に濡れ

注 7 は対照的表現 8 は共に被る物

第百二十三段 9 手にむすび 10 井手 11 無き

注 9 は共に水に濡れる

第百二十三段 10 出で 11 鳴き 12 思ふ

第百二十四段 12 思ふ 13 思ひける

第百二十五段 13 思はざり

注 13 は対照的表現

〈注〉

- 1 「歌語りと伊勢物語」(『国文学』昭54・1)
- 2 『古今集の構造に関する研究』(昭40・9、風間書房)
- 3 「大和物語評釈・五十一」(『国文学』昭41・11)
- 4 「大和物語における在原業平関係章段について」(『解釈』昭53・4)
- 5 「『大和物語』の在中将章段をめぐって」(『関工業高等専門学校研究紀要』第十七号 和57・12)
- 6 雨海博洋「大和物語の伊勢物語意識——大和一六〇段・一六五段を中心とした考察——」(『論叢王朝文学』所収 昭53・12 笠間書院)
- 7 注5に同じ
- 8 『鑑賞日本伊勢物語・大和物語』(昭50・11 角川書店)
古典文学
- 9 この問題については、かつて数年間続いて終了した「伊勢物語拾穂抄を読む会」において私が問題提起を試み、その後、各段を読解する過程でも種々の指摘がなされたが、その後、この問題を正面切って採り上げることなく過ぎた。が、今回、標題に即して論じる部分に限って述べることにした。なお、具体的な用例は同会における会員諸氏の指摘によるものが多い。